

高山寺藏十二天法平安後期點

松本光隆

108

京都高山寺の經藏には、第八十三函第十五號として、「十二天法」一帖が傳えられている。外題・内題に「十二天法」とある粘葉装の本で料紙には楮紙を用いている。縦一六・一櫃、横一二・九櫃で、押界が施され一丁片面七行であり、界高は一四・九櫃、界幅は一・六櫃である。表紙は、原表紙と後補表紙とが存して、共に外題は「十二天法」とある。後補表紙には右肩に「法鼓第九箱」とある。原表紙は、中央上方に外題が存しているが、その下に三条の書入れが存している。右裾の一条は墨にて抹消されてより判讀できない。中央の外題下方にある書入れは「慈珍之本」とある。左裾に存する一条は「僧^{（一）}之本」とあるもので僧名部が墨で抹消されてより、明確には判讀できないが、某字と「^{（二）}」とが存しているように見受けられる。裏表紙の左裾にも書入れが存している

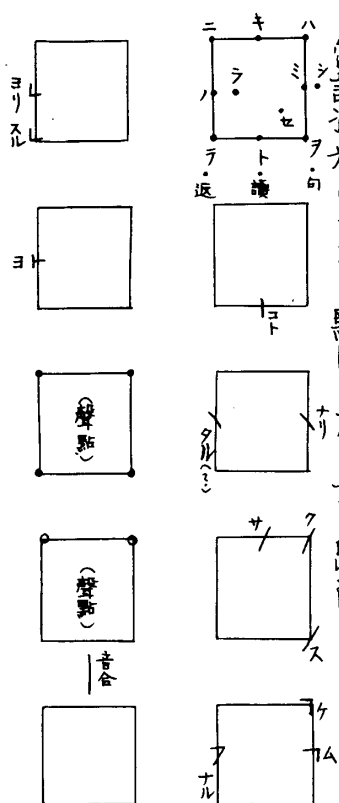
が、「僧^{（一）}」本」とある第三字目の僧名の一字が判讀できない。奥書はなく、當該資料の性格を知る手懸りは、原表紙に存する僧名と裏表紙に存する僧名とであるが、四条存する内の三条は十分には判讀できない。残り一条の「慈珍」も未勘であって、當該資料の性格を知ることができない。

本文の書寫・加點は、平安時代後期と推定される。本文に加點されたヲコト點と假名字體は後掲の如くであるが、使用されているヲコト點は叡山點に合致する。叡山點は、天台宗比叡山所用のヲコト點と考えられ、當該資料も天台宗比叡山關係の資料であると考えられる。

本資料は、叡山點加點の實例としても注目されるものであるが、所用の假名に濁音専用の假名字體が存しており、その濁音假名は、「タ」に對して「マ」、「チ」に

對して「マ」、「レ」に對して「ミ」などの濁音假名を用いており、その濁音假名は、もとの假名字體を左右または天地に裏返したものである。その濁音假名の方法は、他に例を見ないものとして注目されている。

當該資料のヲコト點は、左の如く歸納される。



先述の如く、敷山點に合致するが、ヲコト點は本文の訓讀に利用されて本文に加點されると同時に、漢文本文以外に陀羅尼部分にも加點され、

○羅摩耶婆沙論訶 (六オ三)

の如く陀羅尼の讀みの一部を示すのに用いられている。このようば陀羅尼の讀みの一部として陀羅尼部分にヲコト點を加點する手法は、西墓點資料にもよま見受けられるものであるが、天台宗山門派關係の資料としては、寶幢院點加點の資料をはじめ、高山寺藏眞言法華釋天喜三

年點(重文工部第二七二號・第一八二函第一號・天雨波留點別流)では、梵字にヲコト點が加點されてその讀みを示した例などが存する。

當該資料中には、陀羅尼部以外の漢文本文にも濁音假名は使用されて

○別々に讀み集して (七オ七)
の例を見出すことができる。

又、

○「令」道場(ニ)赴カシメヨ。(七オ六)

○施する(ニ)遍カラ未(ヨリ)已來ハ火をして滅セセ令(ムル)ニと得不「矣」(セウ十)

などの用例が存して注目される。

假名字體表

※濁音假名は下段に示した

ナ	タ	サ	カ	ア
ハ	タ	ナ	カ	ア
ニ	チ	シ	キ	イ
ケ	ケ	ハ	ハ	イ
ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ヌ	ハ	ハ	ク	ウ
ネ	テ	セ	ケ	エ
ル	チ	セ	十	エ
ノ	ト	ソ	下	オ
ノ	ト	ソ	ト	オ

漢字	シ	フ	ラ	ヤ	マ	ハ
ナ	人	ホ	フ	ヤ	マ	ハ
十		キ	リ		ミ	ヒ
シ			リ			ヒ
テ						リ
入	入		ル	ユ	ム	フ
入	入			上	ム	フ
		エ	レ		メ	ヘ
			シ		メ	ヘ
					メ	ヘ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ホ
		ロ	ヨ	ム	ホ	ホ

〔注〕

1 築島 裕「天台宗の古訓點について」(『傳教大師研究』早稲田大學出版會、昭和四十八年六月)

築島 裕『國語の歴史』(東京大學出版會、昭和五十二年十一月)

築島 裕『假名』(『日本語の世界』中央公論社、昭和五十六年四月)

2 沼本克明氏より、東寺觀智院藏の叡山點加點資料に、この種の手法で加點されたものが存する旨の御示唆・御教示を得た。

訓讀文凡例

110

一、高山寺藏十二天法の全文を、加えられた訓點に基き、訓讀して訓讀文を作成した。

一、訓讀文は、原本の假名を片假名で示し、ヲコト點を平假名で示した。原本に存して濁音假名と判斷したもののは片假名に濁點を付し「ダ」「バ」の如く示した。又、「ン」を示すと思われる假名は「人」として示し、入聲の表示かと疑われる「涅(五ウ6)」は「入」として示した。

一、不讀の漢字は「」に包んで示し、再讀の二度目の讀みも「」で包んで再讀である事を示した。

一、原本の聲點は、當該字の下に(平)等と注した。

一、句讀點は、原本に従い右下の「・」を「。」で、左下の「・」を「、」で示し、原本に存在しないものは私には補わない。返點を示す左下の「・」は、加點された字に(反)と注した。

一、訓讀に際して必要と思われる注記は、訓讀文の該當箇所「メ」を付して、訓讀文の末尾に訓讀注として掲げた。

十二天法

東北方大自在天印 右手作拳
安腰右左手五指直豎相着地水二
指屈中節火風空三指各少相去
即成真言曰

曼摩三曼跋勃駄南唵伊舍曼
或婆縛訶

又云唵魯捺羅也娑縛訶

東方帝釋天印 右手同前左手五指
直豎相着地水二指屈中節以風
着火背空屈中節真言曰

唵因捺羅野娑縛訶
又云唵斫羯羅也娑縛訶

東南方火天印 左手作拳安腰
左右手五指直豎相着屈空納着
掌中風屈中節与娑縛訶相招

真言曰

唵阿我那娑縛訶

南方焰摩天印 先合掌二地屈

十二天法

「東北方の大自在天の印 右の手拳に作（シ）て腰の右に「安け。左
は手の五指直く豎（テ）て相（ヒ）著（ケ）よ。地水の二（ツ）の「指は節
を屈（セ）よ。火風空の三（ツ）の指は各（ノ）少し相（ヒ）去けよ。

「即成真言（ニ）曰（ク）

「曼摩三曼跋勃駄南唵伊舍曼 曼摩三曼娑縛訶

又云（ク）唵魯捺羅也娑縛訶

「東方の帝釋天の印 右の手前に同じ。左手の五指「直（ク）豎（テ）
て相（ヒ）著（ケ）よ。地水の二（ツ）の指は中の節を屈（シ）て風を
以て火の背に「著（ケ）よ。空は中の節を屈（セ）よ。真言（ニ）曰
（ク）

「唵因捺羅野娑縛訶

又云（ク）唵斫羯羅也娑縛訶

「東南方の火天の印 左の手拳に作（シ）て腰の「左に安け。右の手
五指直（ク）豎（テ）て相（ヒ）著（ケ）よ。空を屈（シ）て「掌中に
納メ著（ケ）よ。風は中（ノ）節を屈（シ）て娑縛訶と、相（ヒ）招け。

「真言（ニ）曰（ク）

「唵阿我那娑縛訶

「南方の焰摩天の印 先（ツ）合掌せよ。二（ツ）の地「中（ノ）節を屈
して背（ケ）て相（ヒ）著（ケ）よ。二（ツ）の風水屈（シ）て背（ケ）て著

中節背相着ニ風心屈背着ニ
大指押合風中節成真言日

号
唵焰摩耶娑縛訶

西南方羅刹天印 右手作拳安腰
右左手五指直豎相着屈地水中節
ハ空端押地水甲即成真言日

唵地哩底曳娑縛訶

西方水天印 右手如前左手握拳
空勿入掌中風直豎中節少屈即
成真言日

唵縛嚩拏野娑縛訶

西北方風天印 右手如前左手五指
直豎相着地水中節即成真言日
唵縛耶吠又娑縛訶

北方毗沙門天印 先合掌十指内相
又ニ水豎頭柱ニ風豎微屈左空
ハ右掌中押左火甲右空ハ越左
空背入左掌中押右火甲風与可相
招真言日

唵吠室羅縛拏野娑縛訶

(ケ)よ。ニ(ツ)の「火指を以て各(ノ)風の中(ノ)節を押せ。成真
言(ニ)曰(ク)」

「唵焰摩耶娑縛訶」

「西南方の羅刹天の印 右の手拳に作(シ)て腰の「右に安け。左の
手の五指直(ク)豎(テ)て相(ヒ)著(ケ)よ。地水の中(ノ)節
を屈して空の端を「以て地水の甲を押せ。即成真言(ニ)曰(ク)」

「唵地哩底曳娑縛訶」

「西方(ノ)水天の印 右の手前の如し。左の手は拳を抵て「空を掌
の中に入(ル、)こと勿レ。風は直(ク)豎(テ)て中(ノ)節少し
屈(セ)よ。即「成真言(ニ)曰(ク)」

「唵縛嚩拏野娑縛訶」

「西北方の風天の印 右手は前の如(シ)。左の手の五指「直(ク)豎
(テ、)相(ヒ)著(ケ)よ。地水は中(ノ)節を屈(セ)よ。即成
真言(ニ)曰(ク)」

「唵縛耶吠又娑縛訶」

「北方の毗沙門天の印 先ツ合掌せよ。十指内に相(ヒ)「又(ハ
ヨ)。ニ(ツノ)水豎(テ)て頭柱(セ)よ。ニ(ツ)の風豎(テ)
て微し屈せよ。左の空右の掌の中に「入(レ)て左の火の甲を押せ。右
の空は亦左の「空の背に越(シ)て左の掌の中に入(レ)て右の火の
甲を押せ。風は「与、相(ヒ)「招け 真言(ニ)曰(ク)」

113

唵薩羅^ス 醯^ス 溫縛^ス 哩耶鉢^ス 囉^ス
跋多而偷^ス 底羅摩耶^ス 娑縛訶^ス
十二宿^ス 兜^ス 虛心令掌^ス 二火外相^ス
又^ス 空之相又真言曰

唵諾^ス 九^ス 囉^ス 旦^ス 囉^ス 涅^ス 寧^ス 耶^ス 作^ス
曳娑縛訶^ス 有不九耶字有法

又加持所施飲食五味雜粥等料
素辦次五味雜粥稠羹勿令稀
五味者粳米菴豆油摩牛乳蘇各
量多少^ス 意令其有味著少許
塩切須護淨盛於鉢盆小蠟燭
十二枚磨白檀香時花清水於所
施處八方各塗一小壇次當起大
悲無限法施^ス 心於瑜伽中觀作
種々受用^ス 具^ス 之^ス 虛空藏轉明
加持改壇上^ス 量淨校粥香^ス
各々令人擎^ス 隨念誦人後
次念誦人先至心啓請八方天
王并其眷屬令赴道場各依本

十二宿^ス 兜^ス 虛心合掌^ス 二^ス 火外相^ス
又^ス 空之相又真言曰

「先^ス」所施の飲食五味雜粥等の料^ス 加^ス 持^ス ^シ 素辦の
（コトク）セ^ス 次^ス ^ニ 五味雜粥稠^ス 煮^ス 稀ナラ^ス 令^ス ^{ムル} ^コ
と勿れ。五味者^ス 粳米^ス 菴豆^ス 油^ス 摩牛^ス 乳蘇^ス 各^ス ^ノ 多少^ス を^ス 量^ス ^レ 意^ス を^ス 以^ス
て其^ス ^レ を^ス して味有^ス ^ラ 令^ス ^メ ^ス ^少 ^シ 許^ス 鹽^ス を^ス 著^ス ^レ ヨ。
切^ス あ^ス る^ス 須^ス は護^ス 淨^ス ^{ハセ} ^ス ^ヨ。於^ス 資^ス 盆^ス ^ニ 盛^ス ^レ 蠟燭^ス 十二枚^ス
白檀香^ス を磨^ス ^レ 時花清水^ス。所^ス 施^ス の處^ス に於^ス ^ケ 八方^ス に各^ス ^ノ ^一 ^ツ
の小壇^ス ^ニ 塗^ス ^レ。次^ス ^ニ 當^ス に大^ス 悲無限法施^ス ^ノ ^之 ^心 を^ス
起^ス ^ス ^當 ^シ 於^ス 瑜伽中^ス に種々受用^ス ^ノ ^之 ^具 を^ス
觀^ス 作^ス して亦虛空藏の轉明^ス を以^ス 加^ス 持^ス の^ス ^{コトク} ^セ ^ヨ 次^ス ^ニ
壇上^ス ^ニ 先^ス ^ツ 淨^ス 校^ス 粥^ス 香^ス 各々^ス ^ノ
人^ス ^ヲ して擎^ス 令^ス ^メ 念誦^ス の人^ス の後^ス に隨^ス ^ヘ ^ヨ。次^ス ^ニ
念誦^ス ^ノ 人^ス 先^ス ^ツ 心^ス を至^ス ^シ 八方^ス ^ノ 天^ス 王^ス 并^ス ^{セテ} 其^ス ^ノ
眷屬^ス を啓^ス 請^ス して啓^ス 請^ス ^{セヨ}。令^ス 道場^ス ^ニ 赴^ス ^{カシメ} ^ヨ。
各^ス ^ノ 本^ス 隨^ス ^ニ 依^ス 札^ス 觀^ス 誦^ス ^ノ ^之 ^時 に^ス は曳^ス 醯^ス ^ノ 句^ス ^ヲ
加^ス ^{ヘヨ} 別^ス ^ニ 請^ス 集^ス して施^ス して發遣^ス ^セ ^ヨ 樹^ス 左^ス 樹^ス 左^ス の句^ス を加^ス

觀請之時曳繩四句別請
集後松發遺如榻左榻右句次

先東方誦帝釋真言先洗清水
少許即下塗香次下時花次下粥
次下蠟燭挿於粥上未施過已來
不得令火滅矣

次燒香三度奉獻口誦真言無
犯擁護九天正歡喜道場 主、

福祐

次東南方各誦奉天真言次第

而施次南方次西南方次西方次西
北方次北方次東方次諸位遍

即誦須弥正真言加持三七五十
遍次各入塗小壇如次奉獻上方梵天

分

下方地天日月天次誦甘露真
真言次右遶行道讚歎諸大而待

蠟燭火滅次若燭火滅了至心祈
願擁護施主次即向諸天及等

懺謝所獻飲食願惡不如法也
次誦發遣真言末後留少許餘

糝多著清水於粥中著少餅子

(へ)よ。次(ニ)「先(ツ)東方に帝釋の眞言を誦せよ。先(ツ)
清水「少(シ)許を洗(へ)。即(チ)塗香(ヲ)下(セ)。次(ニ)
時花(ヲ)下(セ)。次(ニ)粥(ヲ)下(セ)」「次(ニ)蠟燭(ヲ)
下(セ)」「於」粥の上に挿メ。施する」と通カテ未(ミ)る(ヨリ)已(コ)タ
ハ火をして滅(セ)令(ムル)こと得(レ)不(ス)矣」

「次(ニ)燒香を以(テ)三度奉獻(セ)よ。口に眞言を誦して兼(ネ)
て「求(ムル)より擁護(セヨ)。天王の歡喜道場 主、福祐を乞(ヒ)

「次(ニ)東南方ヨリ各(ノ)奉天真言を誦せよ 次第(ニ)「而(レ)
施せよ 次(ニ)南方次(ニ)西南方次(ニ)西方次(ニ)北方

次(ニ)北方次(ニ)東北方次(ニ)諸位遍(リ)て「即(チ)
須彌王眞言を誦(シ)て三七五七遍加持せよ 次(ニ)各々(ノ)

小壇を塗(リ)て次(ノ)如(ク)上方梵天「下方地天日月天に奉(ル)獻
せよ 次(ニ)甘露眞言「言施飲食眞言(ヲ)誦(セヨ) 次(ニ)右

に遶(リ)て行(ク)道して諸天(ヲ)讚歎(セ)よ。而(シ)て「蠟燭
(ノ)火滅(スルヲ)待(テ) 次(ニ)若(シ)燭火滅(シ)了(ラハ)

心(ヲ)至(シテ)施主を擁護(シ)にまへと祈願せよ 次(ニ)
諸(ノ)天王等に向(ヒ)て所獻(ノ)飲食願惡不如法(ル)ことを懺

謝(セヨ)「也」。次(ニ)發遣眞言を誦して末後に少(シ)許の餘(リ)粥
を留(メ)て多(ク)清水(ヲ)「於」粥(ノ)中(ニ)著(イ)テ少(シ)

餅子「菓子(ヲ)著(レ)て香時花を塗(レ)。惣(ト)して著(レ)了(リ)

菓子匣香時花惣著了誦日

卒 露真言ハ手加持令人擊送淨

寫於地上施与諸惡鬼神願

擁護施立布施歡喜更莫回顧

便須往還然後洗手於道場中

發遣聖衆始藏道場如是依法

者聖賢盡皆歡喜命得福祐

十二宿者師云七曜皆天

廿 甘露真言右手作施
九畏也

曩謨蘇嚩訶野但他薩多野但

住也他噯蘇嚩訶鉢囉素嚩

嚩鉢囉素嚩鉢囉素嚩賀

次食真言手印施餓
鬼法中云々

曩謨蘇嚩訶他鉢囉素嚩路枳

帝噯波羅三波羅々々々

須弥王真言合掌

噯蘇迷嚩羯囉波野噯素嚩

鉢囉素嚩鉢囉素嚩賀

虛空藏普通真言

卒 甘露の真言を誦(シ)て手を以(テ)加持して「令」人をして撃ケシメ

テ淨「鬼に送(リ)て」「於」地上(ニ)寫セ 諸の惡鬼神に施(テ)手セ

よ。施主(ヲ)「擁護(シ)にまへ(ト)願(へ)」。布施歡喜せよ。

更(ニ)廻顧(シ)て「便須往き還(ルコト)莫れ。然して後に手を

洗(ヒ)て」「於」道場の中にして聖衆を發遣(シ)て道場を始(メ)藏す

ることは(ノ)如し。法に依(ラ)は「者」聖賢盡く皆歡喜し福祐を

得令(ム)。(又云七曜「十二宿者師云七曜加日天。十二宿加月天所供」

廿 甘露真言(ニ)曰(ク)《右手作施无畏也》

曩謨蘇嚩訶野但他薩多野但「爾也」他・蘇嚩訶・鉢囉素嚩

次食真言(手印施餓鬼法中云々)

曩謨蘇嚩訶他鉢囉素嚩路枳「帝噯波羅三波羅々々々

須弥王真言 合掌(セヨ)

噯蘇迷嚩羯囉波野噯素嚩・鉢囉素嚩鉢囉素嚩賀

虛空藏普通真言

噯蘇・曩三去 娑去 嚩々 日曜 合 斛引

十 諸天等讚

阿毛引 演毛引 觀毛 泥毛 縛左 誡素羅 緊 那羅那上 囉鉢叉迦

囉鉢叉迦 那野毛 鉢囉素嚩 連摩 藥里 地

資識、囊三去安、縛入日羅、
 斛、諸天讚、
 阿彌、觀泥縛友試素羅、
 那羅、那上羅、又如、那野上
 鉗羅、達摩薩里、多地
 伽羅、尾達摩左、鉗羅、捨麼
 擇企也、你銘、多部多銘、多鉗
 羅、如捨夜、但、你質室羅摩
 拏也、駝、捨、
 都請名、諸天及七曜十二宮神一
 十八宿諸執事地天等真言四
 娜莫、首多沒、駝、
 縛縛、祿、縛多、
 二四、阿、你、寧、底也、
 半左諾、人、案、
 覩娜、縛、捺、捨、尾、麼、
 毛、尾、孕、設、底、
 次、曳、八、摘、枳、
 拔、入、安、縛、

「伽羅^{キヤ}尾^ミ達^{タツ}摩^マ左^サ鉢^{ハツ}羅^ラ拈^ニ麼^モ操^{ソウ}企^キ嚩^フ
銘^{メイ}多^タ部^ブ多^タ銘^{メイ}多^タ鉢^{ハツ}羅^ラ迦^カ捨^セ夜^ヤ五^ゴ但^{ダン}
爾^{ニル}賀^カ室^{シツ}羅^ラ摩^マ釋^{シツ}也^ヤ馱^ト捨^セ引^{イン}
都請召諸天及(ヒ)七曜十二宮神二十八宿諸執并(セテ)地天等
眞言
「娜莫三曼多沒駄引南の上 唵薩囉囉護計觀・娜囉囉捺捨
醯曳引四の阿囉囉底也合素麼の半左諾
乞察合但囉囉護計觀・娜囉囉捺捨
尾麼裏阿瑟叱吞尾孕合設底鉢哩合體
他取反吠曳八各摘杓反寶吽引拏入娑囉賀
是(ノ)人便(チ)能(ク)殊勝福報を獲得せむ。行者供養を修
(シ)訖て即(チ)壇從出(テ)て豆菓餅飯胡麻を取(リ)て諸花
等を屑イテ水に和して瓶盆の中に安(キ)て歡喜(ノ)心を以(テ)
四方に之を散(セ)よ。諸的天鬼神眷屬等に施せむには各(ノ)本
の密語を以て施(セ)よ「之」。
「自在天(ノ)密語(ニ)曰(ク)」
「唵遏哩除微爾曳娑婆訶
天帝釋(ノ)密語(ニ)曰(ク)」

是人便能獲得殊勝福報行者
修供養訖即從壇出取豆菓餅
飯胡麻屑諸花等和水安瓶盃
中歡喜心四方散之施諸天鬼
神眷屬等各へ奉蜜語訖
自在天蜜語曰
唵遏哩唵（秘）你曳（平）安婆訖
天帝釋蜜語曰
唵過移達羅那安婆訖
大神蜜語曰
唵過伽娜曳（平）安婆訖
琰魔王蜜語曰
唵琰魔曳（平）安婆訖
羅刹蜜語曰
唵羅美上安地安多曳安婆訖
諸龍及水神蜜語
唵安羅那曳（平）安婆訖
諸風神蜜語曰
唵縛夜（秘）安婆訖
諸夜叉蜜語曰
唵華叉（秘）達利安縛訖
於此方施諸類鬼神蜜語曰

「唵遏（移）達（達）羅（羅）那（上）安婆訖
「大神（ノ）蜜語（ニ）曰（ク）
「唵遏（伽）娜（曳）安婆訖
「琰魔王（ノ）蜜語（ニ）曰（ク）
「唵琰（魔）安婆訖
「羅刹（ノ）蜜語（ニ）曰（ク）
「唵羅（差）安（地）婆（多）安婆訖
「諸龍及（ヒ）水神（ノ）蜜語
「唵婆（羅）那（曳）安婆訖
「諸風神（ノ）蜜語（ニ）曰（ク）
「唵縛（夜）微（多）安婆訖
「諸夜叉（ノ）蜜語（ニ）曰（ク）
「唵華（叉）達（利）安婆訖
此（ノ）方（ニ）於（イテ）諸の類（ノ）鬼神（ニ）施する蜜語
（ニ）曰（ク）
「唵蜜止（毗舍）遮（南）薩婆訖
「（秘）部（秘）南（秘）安婆訖
「上の如（ク）作法して施し已（リ）セは當に淨く手を洗（ヒ）口（ヲ）
嗽（キ）て還（リ）て「壇中に入（リ）て一切の佛及（ヒ）井を礼し
て常（ノ）如（ク）念誦（セ）よ

唵發止（愚劣）以舍迦南薩婆訶

如（愚劣）上作法施已當淨洗手類還入

壇中禮一切化及并如常念誦

普供養真言 合掌及乎

曩莫三滿多沒馱南薩婆訶

欠搢娜薩（底安頌）羅四輪

誡（曩）釳婆縛（訶）

東

曩謨索（上）魯播（也）他（去）薩友也

法（但）你（也）他（法）唵（四）素魯（一）收羅

素魯沒羅素魯沒羅訶

行者修供養取五味雜粥多

著清水粥中著餅子菓子塗

香時花抱著（誦）甘露真言

加持（又）當起大悲無限施（心）

於瑜伽中觀作種（受用）具（心）

八虛空藏轉明加持次更防護其

身使（一）如法次破自施食（可）由

次歡喜（心）施諸天鬼神眷屬等

本密語施（富）從東北為首其食

寫地各三杓 次東（南）乃至北方

又於此方施諸類鬼神寫於地上

「普供養真言（合掌為印）」

「曩莫三滿多沒馱南薩婆訶」欠搢娜薩（底安）羅四輪

引（給）給（手）誡（曩）釳婆縛（訶）

東

「曩謨索（上）魯播（也）他（去）薩友也」法（但）你（也）他（法）唵（四）素魯（一）收羅

他（去）法（但）你（也）他（法）唵（四）素魯（一）收羅

「行者供養（ヲ）修（シ）訖（リ）て五味の雜粥を取（リ）て多（ク）

清き水を粥の中に「著（セ）よ。少（シ）の餅子菓子塗「香時の花を著

（レ）よ。惣（テ）著（レ）了（リ）て甘露の眞言を誦して以て「加

持（セ）よ「之」。又當に大悲無限の法施（ノ）「之」心（ヲ）起（シ）

持て「於」瑜伽の中に種々に受用（ノ）「之」具を觀作れ。亦虚空藏

（ノ）轉明を以て加持（セ）よ。次に更に其の「身を防（護）（セ）よ。

「使」一々に法の如く（セ）しめ（ヨ）。次（ニ）施食（ノ）「之」

所由を啓白（セ）よ。次に歡喜の心を以て諸の天鬼神眷屬等に施（セ）

よ。各（ノ）本（ノ）密語を以て之を施（セ）よ。當に東北從首と爲よ。

其（ノ）食を地に各（ノ）三杓（ヲ）寫せ。次（ニ）東、々（東）

南乃至北方（ヨリ）。又「於」此（ノ）方にして諸の類の鬼神を施（セ）

よ。地の上に寫し於け「又云（ク）淨き處に送（リ）て「於」地の上

に寫せ。」次（ニ）施主を擁護せよ（ト）願（セ）よ。次に「所設

供具可咲鹿無惱亂冥衆「唯願諸天神等布施歡喜を謝（セ）よ。次に

發遣の眞言を誦（セ）よ。《彼れ若し種々の異相を示（サ）は當に自

發遣の眞言を誦（セ）よ。《彼れ若し種々の異相を示（サ）は當に自

幸

又之送淨又
唱此也

次願擁護迄主 次謝

祈設供具可咲麻思惱亂冥衆

唯願諸天神等布施歡喜

次誦發遣真言 般若示種い舞相常同
好に是品依更水し相

若彼更求者應復施之勢使豐

原令其歡喜若物少者當隨所

有而已如是作施已當淨洗手

毒嗽口還入道場礼一切仏及并如

常念誦 發遣真言曰

唵縛日囉 不穆乞察 不莫入

已上神供法

金葉又主馱多利娑縛訶 神龍印 二手内縛以右

押左空指入掌中二火指甲立而屈中節即成

風神印 不改前直豎三火指猶如針也

幸

或屈左手空以地水押空甲次印

不改前印屈火中節通用毗密

止等咒也

(ラ)心を好くす「好(シ)にる」[當]し。是(レ)即(チ)

彼(レ)更(ニ)求(ムル)「之」相(ナリ)「若(シ)彼れ更に

求(メ)者復之を施す應し。務(イナ)ムて豊に「厚カヲ使(メ)て其(レ)

をして歡喜せ令(メ)よ。若(シ)物少(ク)者當に所「有に隨(フ)

「當」(當)「カラク」而已。是の如(ク)施(フ)作し已(リ)て當に

毒淨く手を洗シロ(ヲ)「嗽(キ)還(リ)て道場に入(リ)て一切の

佛及(ヒ)井を礼(シ)て「常(ノ)如く念誦(セヨ) 發遣真言

(ニ)曰(ク)

「唵縛日囉 不穆乞察 不莫入

已上神供法

「唵藥又主馱多利娑縛訶 神龍印 二手内縛以右

火指甲立而屈中節即成「風神印 不改前直豎三火指猶如針也

「或屈左手空以地水押空甲次印」不改前印屈火中節通用

毗密「止等咒也」*

訓讀注

- ニオ₁ 一丁表ニ兩手ノ圖「高山寺」朱印アリ。
- 6 「舍」ハ朱書、「企」ヲ訂セリ。
- ニウ₃ 「節」字ニ句點アリ。
- キオ₁ 「含」字右傍假名ニ字目虫損ニテ未詳。
- キオ₃ 「其」字上欄ニ補入。
- キウ₄ 「サル」ハ「遍」字ニ加點。
- 4 「令」字ニヲコト點「する」アリ。
- 5 「矣」字下邊中央ニ星點アルカ。右傍下方ニ朱書「レ」トアリ。
- ハウ₁ 「施飲食眞言」ハ朱書右傍補入。
- カウ₂ 「主」字本文ハ「之」字ニ重書カ。上欄ニ朱書ニテ訂ス。
- 6 「令」字朱書ニテ上欄ニ本文「命」字ヲ訂ス。
- キオ₅ 「隣」字下「轉」字見消。
- キウ₆ 「獲」字「獲」字ヲ訂ス。
- キオ₆ 「於」字上ニ朱書「又」字アリ。
- キオ₁ 「望」字右傍ニ朱假名アリ。虫損ニテ未詳。
- 1 「駄」字下「裏」見消。
- キオ₁ 「裏」字右傍ニ朱書「甘露眞言（ニ）曰（ク）」

印右の手を以て五指（ヲ）舒（へ）て外に向（ケ）よ」アリ。

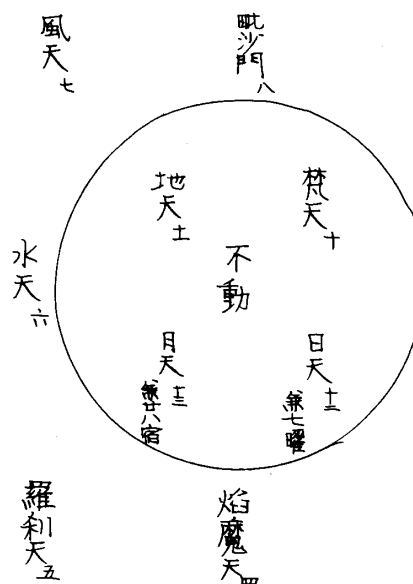
4 「行」字右傍ニ朱書「神供次第」アリ。

キオ₄ 「異」字朱書補入。

6 「厚」字「原」字ヲ訂ス。

キオ₃ 原本ニハ十七丁表ニ以下ノ記載アリ。

大自在_九 聖天 帝釋_ニ 火天_三



「付記」

本資料の翻刻につき、高山寺御當局の關係各位より御温情を賜った。築島裕博士には、折に觸れ御指導・御誘掖賜った。記して學恩に深謝申し上げる次第である。